

グレード制によるピアノ指導法

白 井 夏・渡 辺 優 子
荒 川 久美子・松 尾 やすこ

A Grade System in Piano Instruction

by

Natsu Shirai, Yūko Watanabe

Kumiko Arakawa, Yasuko Matsuo

I はじめに

ピアノ学習の方法は、非常に多種多様であり、色々な面から研究が進められつつある昨今であるが、短期大学幼児教育科でのひとつの試みとして、当青陵女子短期大学で、今井虎夫前教授を中心として、昭和48年度より実施してきたグレード制とその内容についてまとめ、今後の問題点など考えてみたい。

II グレード制によるピアノ学習コースの設定

(1) ねらい

ピアノ学習にグレード制をとり入れることにより、どのようなメリット、デメリットが考えられるか。

まずメリットについては、個々の学生自身による学習目標の明確化、各々の実力の明快な把握と、進級に伴う学習意欲の自然な増進等により、入学以前のピアノ学習経験の差が緩和される。次にデメリットとして、グレードによる束縛感、学習者間の競争心を助長することにより、優越感、劣等感を生ずる等がある。

以上のことが予想できるが、本学のような短大幼児教育科学生のピアノ学習方法として、入学時、ピアノ学習経験の差が大きい人達（図1，2）に対して、卒業までに、基礎的な力とともに実践的応用力を養うためにグレード制が生かされるのではないか、等のねらいのもとに、この方法をとり入れることとした。

以下、本記述は、グレード制が完成した昭和51年度入学生163名の実施例である。

(2) 設 定

本学においては、短期間でのピアノ演奏技術習得の困難を緩和する為、コールユーブンゲンとバイエル教則本による音楽参考テストを実施している。その為、図1，2にみられる通り、全員が入学以前にピアノを履習しているが、約80%の学生が初歩段階のまま入学してきている現状である。さらに、厚生省保母養成科目の器楽内容で、バイエル教則本がとりあげられているので、

図1 入学時ピアノ履習年数

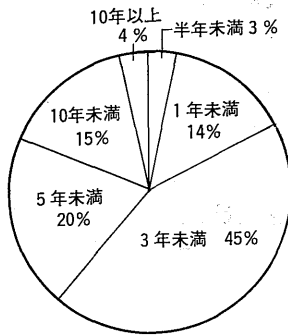
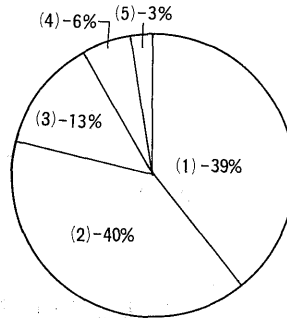


図2 入学時自己評価



バイエル程度		ソナチネ程度		ソナタ程度
1	2	3	4	5

入門テキストをバイエルとした、ピアノ学習大系（バイエル ツェルニー100番，30番～）に則した基礎的楽曲と，保育現場における実用的楽曲の併用とした。

単位認定には，次あげる保育者としての基礎的演奏力を修得しなければならない。

- 最低限バイエル終了程度以上の演奏能力
- レパートリーの保持
- 新しい曲の読譜に際しての，正しい視唱（奏）力と判断力

以上の点を充分考慮の上，ピアノコースを作成した。（以下はピアノコース表1を参照のこと）まず，1級から10級までを設定し，各級の目標を教則本によって定め，8級合格で単位を認定することとした。

ポイントの項目でピアノ奏法上の留意点を基本から，音楽的表現，解釈に至るまで，進度に応じた。

メカニックでは，指の訓練として，又，基礎的テクニック習得の為，音階練習と分散和音練習をとりあげた。

教材の項目では，様々な教則本，練習曲集をあげており，和声的な楽曲から対位法的な楽曲まで，程度に応じ学べるように配慮した。又，実用的楽曲では，子供の歌の伴奏から，高度なドイツリート伴奏までとりあげた。さらに，行進曲（最低15曲演奏可能のこと），子供の歌単旋律視奏も含め，現場のニーズにかなうように配慮した。

Ⅲ グレード制によるピアノ学習の実施

(1) 授業内容

日常の授業は，コースにより定めた進級試験課題内容表2に従い，併せて，コース内容の充実をはかる為，又，教育実習後の学生側からの強い要望もあり，表3に示す課題が，設けられている。単位認定の基準である8級合格のためには，基礎的テクニック習得のためのツェルニー100番と，現場で要求される応用的な読譜力をみるためのメロディー初見の試験が課せられる。又，その他の課題も全部消化しなければならない。量的に，かなり多くなるが，これは保育者としてのピアノ演奏能力が多面性を要求される（応用力が必要である）ことと，経験量による読譜力養成という観点により成っている。

表2 進級試験課題曲

1 級	2 級	3 級	4 級	5 級
<p>I</p> <ul style="list-style-type: none"> 。ツェルニー50番 後半 3曲より当日1曲指定 。パッサパ平均律Iより 6番 <p>II</p> <ul style="list-style-type: none"> 。任意の1曲 。ドイツ・リート伴奏 シェーベルト・シューマン作品3曲より当日1曲指定 	<p>I</p> <ul style="list-style-type: none"> 。全調アルペッジョ 当日1曲指定 。ツェルニー50番 前半 3曲より当日1曲指定 。パッサパ平均律Iより 2番 <p>II</p> <ul style="list-style-type: none"> 。ショパン・シューマン作品より任意の1曲 。日本歌曲伴奏 山田耕作作品3曲より 当日1曲指定 	<p>I</p> <ul style="list-style-type: none"> 。初見視奏 。スケール短音階全調 当日1曲指定 。ツェルニー40番後半 任意7曲より当日1曲 指定 <p>II</p> <ul style="list-style-type: none"> 。コニコネ50番伴奏5曲 より当日1曲指定 。パッサハインベンション3 声5曲より当日1曲指 定 。ソナタ (ベートーヴェン 作品, 但しop.1を除く) 任意の1曲 	<p>I</p> <ul style="list-style-type: none"> 。スケール長音階全調 当日1曲指定 。ツェルニー40番前半より AB各3曲のグループ 指定, 1週間前AB発 表, 当日1曲指定 <p>II</p> <ul style="list-style-type: none"> 。パッサハインベンション2 声3曲より当日1曲指 定 。ソナタ (ハイドン・モーツアル ト作品) より任意の1曲 	<ul style="list-style-type: none"> 。ツェルニー30番後半より AB各3曲のグループ指定 1週間前AB発表, 当日1 曲指定 。パッサハインベンション2声 2曲より 当日1曲指定
<p>6 級</p> <ul style="list-style-type: none"> 。ツェルニー30番前半より AB各3曲のグループ指定 1週間前AB発表, 当日1 曲指定 	<p>7 級</p> <ul style="list-style-type: none"> 。ソナチネアルバムI 6・9・12番より 当日1曲指定 	<p>8 級</p> <ul style="list-style-type: none"> 。ツェルニー100番より AB各3曲のグループ指定 1週間前AB発表, 当日1 曲指定 。2♯・2b, 8小節程度の単 旋律初見視奏 	<p>9 級</p> <ul style="list-style-type: none"> 。バイエル100番以降6曲より (103除く) 当日1曲指定 	<p>10 級</p> <ul style="list-style-type: none"> 。バイエル98番までの任意の1 曲

注 4級以上の試験は2回に分けて受験

表3

現場で役に立つ教材		
内 容	実 施 時 期・方 法	ね ら い
マーチ 15曲	1年 夏休み 課 題	とまらない, 目的に合ったテンポ
子供の歌より メロディー100曲	1年 春休み～ 2年前期 試験2回	正確に弾く, 指使いを考える
子供の歌より 伴奏A B各7曲	1年 春休み～ 2年 試験3回	とまらない, 指使いを考える, 歌に合せる
簡易伴奏	1年 2・3月 授業3回	簡単なメロディーにI・IV・Vの和音を中心としての伴奏付け記譜演奏を実習する。
そ の 他		
連 弾	<ul style="list-style-type: none"> 1年10・11月実施 選曲・組合わせは担任が行ない, 色々な分野から選択する。 	
音楽会	<ul style="list-style-type: none"> 1年1月実施 クラス単位で行なう ピアノ連弾・独奏・独唱・合奏・合唱等, 全員が必ずどれかに出演する。 出来るだけ学生自身の力で会の運営, 練習等を行なう。 	

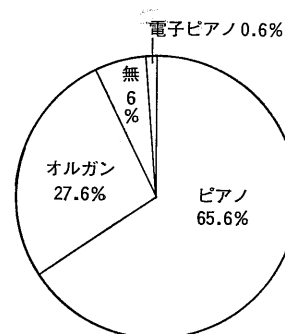
(2) 授業方法

レッスンは、入学時の学生実態調査によるピアノ学習経験年数、内容、自己評価等を考慮し、90分に5～8人のクラスとし、学習経験の少ない者の指導に時間的余裕を持たせた。原則として個人レッスンの方式で行なうが、場合により、グループレッスンも可能である。学生は、8級合格までは、春・夏、両休暇中も各3回ずつ継続してレッスンを受けることが義務づけられる。日常の学習の所見、平常点は担任により記録される。

(3) 学内及び自宅でのピアノ保有状況

学内には、常時30台のピアノが練習用の開放され、自宅所有台数も、オルガン等合わせて94%にまで普及している。(図3)しかし、2年間で幼稚園教諭、保育士の2資格習得のため、必修教科及び実習が多く、学内では同一時間帯に練習が集中することも見られ、練習室の不足が生ずることもある。

図3 ピアノ所有状態



(4) 試験の実施

進級試験は、1年次6回、2年次4回とし、学生は、試験の準備が整った時点で、担任による推薦をうけ受験する。卒業試験までに8級に合格しない場合は、3回以上の補講により、単位を認定している。

採点は、原則として複数の指導教師により行い、全体的にミスの少ない、音楽的な安定した演奏を合格基準とし、平常点も加味し、グレードを認定している。

8級合格の為の難関とみられるメロディー初見試験では、原則としてミスなく、ある程度のは

やさで演奏する事を要求している。不合格者には、2年夏休みに特別に初見のための補講を行なう。

Ⅳ グレード制によるピアノ学習を実施した結果及び考察

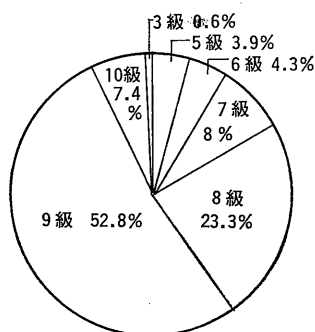
(1) ピアノ学習進捗

級別人数を1年終了時、2年終了時で示したのが、図4、である。合格点である8級に焦点をしぼり、進捗を示したのが、図5である。この表でわかる通り、卒業までに全体の89%が8級以上に進級し、あとの11%は補講により単位を認定した。入学時のピアノ履習歴及び自己評価の個人差が大きいことを反映し、その後の進捗についても、2年後期において1級より9級までと差が大きい。

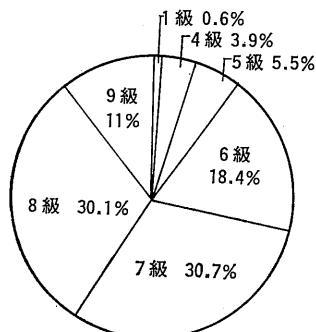
入学までの履習歴と入学後の進捗について、8級合格の時点を取りあげて示したのが図6である。この図のとおり、ピアノ履習歴と進捗は、大きな関連があるが、個人の努力等である程度の変動があることがわかる。

図4 進級状態

1年後期



2年後期

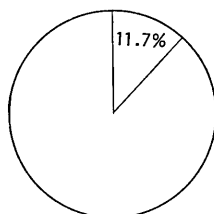


級別人数

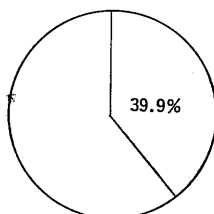
級	10	9	8	7	6	5	4	3	1
1年後期	12	86	38	13	7	6		1	
2年後期		18	49	50	30	9	6		1

図5 進級状態（8級以上）

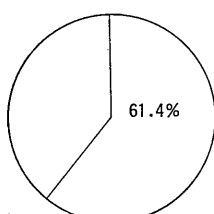
1年前期



1年後期



2年前期



2年後期

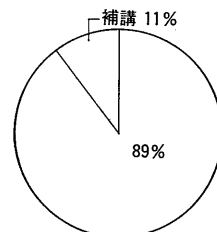
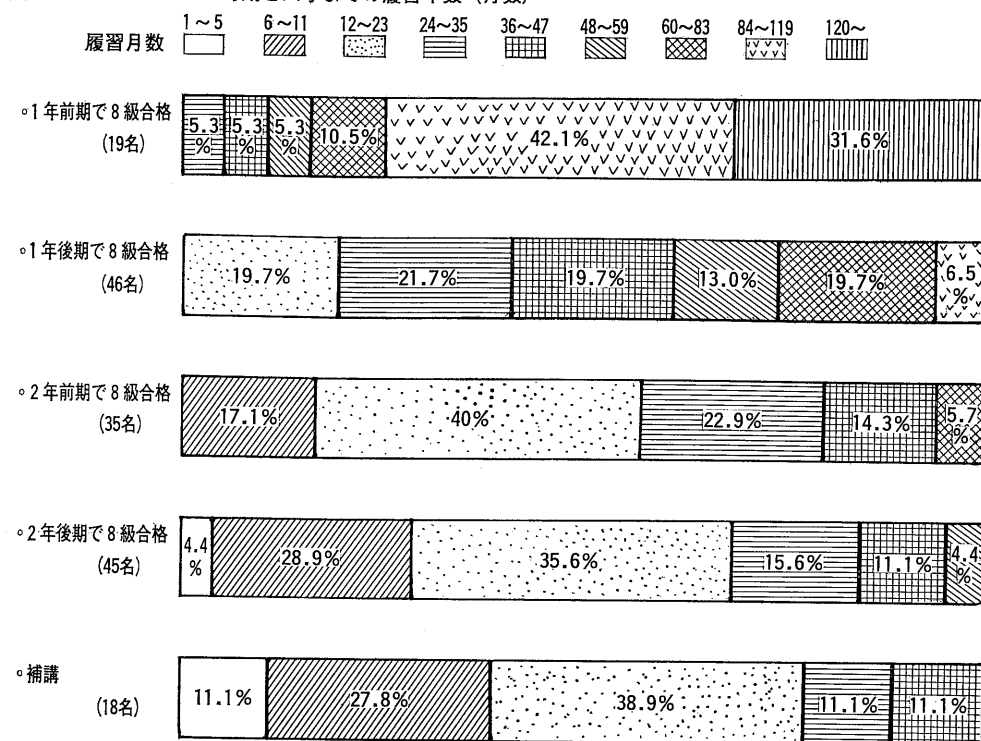


図 6 8級になった時期と入学までの履習年数（月数）



(2) 学生に対するアンケート結果及び考察（52年11月実施）

回答率 93%

○日常のピアノ学習が負担になるかどうか

大変負担になる	59.9%
普通	40.1%

その主な理由（大変の回答者のみ）

ピアノ履習歴が短い。
 音楽の基礎的知識の不足。
 練習時間がとれない。
 努力しても効果がない。
 楽器がなくて練習できない。

○各グレードに課せられた曲の程度

高い	37.5%
普通	60.6%
低い	0%
答なし	1.9%

○進級試験課題曲数

多い	53.9%
普通	43.4%
少ない	2.7%

○初見試験の程度

高い	30.3%
普通	67.8%
低い	0
答なし	1.9%

○グレードで決められた曲以外のもの

弾きたい	46.7%
別になし	50.7%
答なし	2.6%

具体的にあげられた曲

(弾きたいの回答者のみ)

ブルグミュラー	いわゆる名曲
ポピュラー曲	現場で使う曲

○自分のピアノ学習について

積極的にやった	5.9%	いやいややった	11.5%
楽しくやった	8.4%	なまけた	22.1%
普通	38.3%	その他	13.8%

上記回答中のその他の理由

勉強にムラがあった。	8級のためにやった。
適当にやった。	気ばかりあせてだめだ。

○ピアノがすきになったかどうか

すきになった	29.0%
どちらでもない	65.1%
きらいになった	5.9%

すきになったの主な理由

もともとすき。曲を多く知った。
上達した。曲がひけた楽しさで。

きらいになったの主な理由

前からいや。人と差がついて。
強制される。自信なくした。

○今迄のピアノ学習をふりかえって、の中から、回答が比較的多かったもの。

よかった面

行進曲がよかった。 伴奏、簡易伴奏がよかった。
 曲を多く知った。 初見が勉強になった。
 進級試験の回数が多かったためよく勉強した。
 進級するよろこび。 読譜力がついた。
 音楽は大切、努力しなくてはと思った。

不足な面

もっと現場で役立つものを（伴奏、行進曲、等）。基礎的なものが不足である。数多く弾くためのそぎ仕上りが不十分。グレードに追われ、試験曲しか弾けなかった。もっと楽しいレッスンを。進級テストの回数を増してほしい。
 伴奏のための授業をしてほしい。強制される。自信を失った。

以上の結果はグレード設定当初より予測された内容も多いが、特に問題となるものを取りあげて、考察してみる。

i 日常の学習について

この質問に対して、大変と答えた数は、59.9%と多く、その理由として、基礎知識の不足をあげている。これは高等学校で芸術科音楽の選択がなかった、又選択しなかった、そのほか今迄の音楽の嗜好、環境その他の要因を含めて、ピアノ履習年数にもあまり関係なく全般的に目立つ傾向である。

ピアノ学習に必要な基礎知識（広い意味での読譜力）、例えば音階・音程・リズム・テンポ・表現上の諸記号・フレーズ・アーティキュレーション・ディナーミク等の不足から起きて来る演奏上の熟達のむづかしさ、音楽的能力育成の非効率さにどう対処してゆくべきか？

又、きく事・弾く事・歌う事・書く事・等を総称してソルフェージュと呼んでいるが、それらの基礎的能力が低いために学習者が時間をかけて学習したにもかかわらず勉強がはかどらないなどの不満から、次の回答、努力しても効果かないとなり、これが昂ざると、ピアノ嫌い、音楽嫌いにまで至って、ピアノ学習に反感を持つようになるのではないか。

これらの問題を少しでも解消してゆくには音楽理論・声楽・ソルフェージュと共に、総合的に力をつけてゆくべきものと考えられ、本学にまだないソルフェージュの時間を持つことの必要を痛感する。

次に努力しても効果がないについては

上記のほかに

- a 8級で単位認定のラインを置いた現グレードの設定のしかたによる。特に履習歴の浅い学生にとっては8級が2年間での最終目標になり、その間進級の実績により認められたと自信をつける機会が少ない。
- b 指導者の導き方の適否と学生の勉強方法の問題
 様々の履習歴の学生が集まるのであるから、それぞれの段階に応じ、常に励ましつつ、1人1人にふさわしい指導を旨ざしてはいるのだが、なお、学生の自覚、努力を待つと共に指導する側も謙虚に反省、研究の必要があるだろう。
- c グレード制での進級試験を受ける際に、不可抗力による失敗のために進級出来ず、未熟の為それが心因性の失敗癖を助長し、ひいては自信喪失につながる例もある。

ii グレードで決められた以外の曲が弾きたい。

この問題は、前記アンケート中、進級試験課題曲数が多いの回答にも関連してくるもので、自由に弾いてよいのだが、実際は殆んどどの学生が余裕なく、グレード外のは弾けない状況である。その他、現グレードでの選曲にも関係があるし、又、決められている事自体を強制と感じ、反撥もあるかもしれない。いずれにしても、「自分で自由に選び、やりたいものを」という気持は、尊重し、育ててゆくべきものであると思う。しかし、自分で選曲するにはまだ学生自身に不足な面も多いと思われるし、これも含めて、今後大きくはグレードそのものにつながる問題として、研究課題のひとつである。

iii 今迄のピアノ学習をふりかえって、よかった面、不足な面

ここでは、よかった、不足である両方に圧倒的に現場ですぐ役立つものについて書かれている。すでに設定内容の説明で述べた如く、現グレードでは、入学時の学生の実態に合わせ、一般的なピアノ学習の大系と、幼児教育科として現場での実践に役立つ学習と併行して進め、このふたつが相互によりよき影響をもたらす事を目標として考えているものであるが、学生は実習で、現実に役立った経験などから、それらを求める気持が強いのはやはり当然であろう。しかし、当面だけの問題ではなくて、ピアノとしての基礎学習は、やがて将来自分自身の力で求めるものに向って大きくのびてゆくための大切な原点となるべきものなのである。

(3) 反省検討の結果51年度以降現在までのグレード内容の変更

1 進級試験課題曲数の減少

前記の通り、2年間での8級合格率は妥当な線とは思われるが、その反面、質的なもので不足も目立ち、この原因のひとつは学生の負担過重とも考えられるためである。

2 幼児教育科としての必要な分野の学習方法変更

メロディー奏、子供の歌の伴奏を、2年次になってからの試験の課題とした従来のやり方ではなく、1年次からレッスンの中で、ゆとりを持ち、着実に消化してゆくことにした。

3 基本コース(7.8級)における教材拡充

(バッハ、パルトーク、カバレフスキーの作品導入)

ポリフォニーの音楽は5級から入れてあるが、これでは多数の学生の学習に関係ない結果となるので、基本級から課して、あわせて左手の確立した動きを目標とし、その他、民族的な音列を持つもの、リズムや拍節に特徴があるもの等にもふれ、多様な、又現代的な音感覚を拓げてゆく。その他、日本人としての音感覚に基いたものも重要であり、邦人作品も検討中であるが、目下、連弾でとりあげている。

4 進級試験、課題曲の選択を多くすること。

大枠は決められているのだが、その中でもなるべく自由に選択出来る範囲をひろげた。

V ま と め

以上、種々の考察を加えて来たが、グレード制によるピアノ学習では、

- ・自己の実力の明確な把握
- ・常に目標を持ち計画的な学習
- ・進級による自信と意欲増進
- ・共通課題のため学習の能率化と学習者間の相互扶助の芽生え

等のメリットをあげることが出来、入学時に音楽的レベル差のある学生達を短期間に一定水準まで高め、かつ個々の力を充分にのばすことにおいて効果をあげて来た。常に目標に向い努力を

重ね、学生自身もある程度の自信を持つまでに至った。本学においては現場の実践力を身につけるための学習法として適切であると思う。

しかし、メリットは反対にデメリットにつながるという事も又考慮されなければならない。

ピアノ学習とは、指が早く動くようになる事や、単に楽譜に書かれたものを正確に音に移しかえる事ではなくて、鳴りひびく音の中から、又新しく楽譜を越えて生き生きとした自らの感動を作りだし表現してゆく事を意味する。その自分自身の感動を外的に伝える手段として、演奏能力が必要であると自ら求めればこそ、日々の忍耐強い努力も又可能になるのではないか。さらに、そこに指導者の指導のしかたが、重要である事は云うまでもない。改めて、音楽を愛好する心を育てるには、の原点に立って、グレード自体も含め、よりよく、今後いかにあるべきか研究を進めてゆきたい。

最後に、グレード制導入の中心となり、本学に於けるピアノ指導の方向を示唆、推進された、今井虎夫前教授に心からの敬意と感謝を捧げます。